

## 「信仰と民族親善」

(一九六九年四月十六日、ソウル・YMCAでの

「韓日基督者親善集会」における拙講演)

藤澤 武義

父なる神の恩恵と多くの教友の愛や祈りに支えられて、約二年四か月ぶりに再び来させて頂き、主イエス・キリストに在りて、皆様にお目にかかることが出来、大感謝であります。悪天候のため欠航となり、昨日の堤岩監理教会再建起工式に間に合わず、出席出来なかつたことは申訳なく、また残念でしたが、本日此の良き有意義な講演会を催され諸先生始め信篤き皆様の前に拙話をさせて頂くことになり、一層大なる感謝光栄であります。

前回は宋斗用先生、ソウル大教授柳達永先生等のお世話で来巡らせて頂き、日本の旧悪についての謝罪が主目的でこのソウル始め方々で主に在りて心から謝罪致しました。

今回はもう謝罪する必要はない、と多くの韓国教友方が言つて下さいますが、でも私は日本人の一人として、特にキリスト信者として、謝罪せざるを得ないのであります。過去度々の、また長きに亘る且つ残酷な日本人の大罪悪を、主に在りてお赦し下さるよう、心からお詫び致します。

三百七十余年前日本武將豊臣秀吉の大軍が不当にも二回に亘つて侵入し、皆様の先祖の方々に数々の悪事、残酷を重ねまして何とも申訳ありません。

そして普通一九一〇年〜一九四五年の三十五年余のいわゆる統治時代に当時の日本官憲たちが、先祖の方々や皆様方に圧制・責苦等を加え大罪を犯しましたが、三、四年前に読んだ数書によればそれらは実際は五十年以上に及んで居り、更にこの一、二年來読みました金達寿氏著「朝鮮」、池明觀氏「流れに坑して」や呉允台氏「日韓キリスト教交流史」等によれば日本政府は一八七六年夏から圧制を振つたそうで、以來六十九年もの長年間、大罪を重ねまして何ともお詫びの申しようもなく、ただただ何卒お赦し下さい、とひたすらお願ひするのみであります。

堤岩里で教会と附近農家に加えた残酷を始め、かく長年間日本官憲たちが犯した諸罪悪は到底数え難く、まだその全部を知り得ず、知っているのも今ここに詳しく述べる時間なく、省略しますが、堤岩教会のこと一つとつてみても、或は三七年頃から日本式神社を建てそれへの参拝を強制したので、偶像崇拜故、拒否反対されたキリスト者に加えた言語道断な迫害責苦を考えても、どうしてあんなひどいことを彼らがやつたか理解に苦しむのであります。

五十年たつてもそれらの大罪は未だ赦されず、日本人の一人として韓国の方々の前に全く顔上げのならぬ思いであり、過去長年間そんな大罪悪を重ねた日本に、且つ初期その罪悪を犯しつつある時代に生まれたこと、すなわち日本人であることを(少くとも韓国の方々の前に)恥じる思いさえいたします。

皆様の中には罪はお互いだから私の謝罪は不要、更に自分達の方こそ謝罪すべきだと言つて下さる篤信の方々あり、殊に「同じ民族(元同国民)」が南北に分れて対立交戦して居り慚

愧に堪えず、先生から謝罪される資格がなく、もう謝罪は止めて下さい」と言われた徹信の方さへあります。それでも、こういう思いをこめて、心から繰返し謝罪したのであります。どうぞ主に在りてお赦し下さるよう、また多くのお知り合い同胞方にこの衷心からの謝罪をお伝え下さるよう懇願する次第であります。

そしてかく日本の大罪をお赦し下され、古来文化的に特に親近の關係にあつた両民族として、旧交を温め旧に倍して親善交友に進み、文化発展と世界平和に貢献したいものであります。

韓日両民族は古来文化的に大層近い親しい關係にあり、また韓日両国は地理的に最も近い所にあり、殊にわれら両民族は文化史的に先祖が同じであるとされ（金沢庄三郎「日鮮同祖論」、石田英一郎他三氏共著「日本民族の起源」等による）、また前回來韓中大邸で盧明植慶北大教授(当時)から聞いたのですが、医学的考古学的にも（二千年以上前の古人骨の比較研究により）同祖先だとの學說もあるそうであります。だとするとなお更のこと、われら両民族は融和、親善、友好し、共に正善の文化的発展と眞の東洋かつ世界の平和、両民族・広く全人類の眞の幸福のため尽すべきであります。

それにはキリスト信仰が必要（殊に無教会流の信仰が必要）なのであります。何故でしょうか。

即ち眞の融和・親善・交友は相互間の平和の基礎の上に築かれるものであり、眞の平和はこの信仰によってこそ達成されるものだからであります。

眞の平和は先ず心から始まります。形だけ平和を装つても、心が伴っていないなら、形式だけ外形だけの平和は、些

細なことから容易に破れ去ること、古來史上に無数の実例あり、現実一般人間社会にも屢々目撃される事例であります。故に先ず私達の心が不斷に眞に平和であることが肝要であります。

新約聖書原語ギリシャ語の「エイレーネー」には平和の他に平安の意味も有り、日本語聖書にも韓国語聖書にも両方に使い分けてあります。平和と平安とは結局同じ心の状態なのであります。どんな時にも喧嘩・口論や争斗をしない、どんな難病や逆境、迫害とか瀕死等の時も動揺しないで平和・平安で居ること。尤も普通にはそれは至難です。

こういう平和平安の心境になる唯一至上の途は、天地万有の主宰なる神・絶対者に結び着くこと、それにより絶対的境地に入り得るからです。それには信仰に生き、イエス・キリストにより罪を赦され義とされて初めて神に結び着くのです。主の十字架を仰ぎ罪の己に死に、キリストが内在し給うことによつて生きることです（ガラテヤ書二1920等）。

神の独子キリストはどんな時にも立腹せず、反逆者ユダに對しても（彼に連れられてロマの兵士等が御自身を捕えに來た時）「友よ」と本心から呼びかけられ（マタイ伝二六50）、またガリラヤ湖で大風大波の中に木の葉の如く揺れる小舟の上に悠々と安眠せられました（マルコ伝四38）。かく主は絶対的エイレーネーのお方であり給います。

主に在る絶対的エイレーネーの福音が聖書中沢山記してあります（ヨハネ伝一四27、ピリピ書四7等々）。己に死に、キリストに生きるキリスト者もそうなれる、それに近づけるのです。使徒等は種々の迫害苦難に会い、ステパノ（使徒伝七5960）やパウロは殉教の死を遂げ、伝説によればペテロは逆傑

にされ、一―三世紀の迫害で何万の信徒が火刑や猛獣の餌食にされたりしましたが、迫害者即敵を憎まず主に在りて平和平安に喜んで殉教したのです。以後の歴史にもあり、殊に当韓国には感銘感動に溢れる多数の美談良証があります。

韓国程ではないですが、日本にも多少の良い証があります。近い方の私のよく知っている例二、三。

福岡で戦後の混乱期に日中両国のブローカー被殺の事件あり、その殺人実犯人でなく又現場にいなかったI、N両君が不当の嫌疑で死刑の判決を受け、両人は二十二年余無罪を叫び続け、殊に後者は誤審につき裁判官に度々怒鳴った由。

次第に信仰的になり四、五年前から顔付も温和になったし、前者は十数年前入信、漸次深く進み主の救の恵に浴し、感謝と喜びで何時も顔が輝いて居り、囹圄にいる死刑囚とは到底思えないのです。

終戦時兵営で両眼と両手を失った守山宗一君は夫人に逃げられ、二才の女兒を抱えて言語に絶する苦勞、点字聖書を得、出血唇読、入信、救を体験し感謝喜びの平安の人と変わり、好伴侶を恵与され、更に徹信、聖書研究、歡喜に溢れ宮崎県下で伝道中。

また鹿児島県下の国立癩療養所勤務、熱信で愛の人なる井藤道子さんの老母堂（親一人子一人の生活）は昔から琴や生花を人に教えたりされ、その楽しみの故に、信仰を奨められても入信し得ないで居られたのですが、七年余り前外出中交通事故で片足切断、倒れて頭を痛打し五日間昏睡（今も脳作用悪く読書やお針至難）。一足飛びに入信し早く徹信、絶対信頼の靈境に進まれ、お子さんが心配された今後のことも神様が最善を為し給うとて大安心、猛台風で同所の屋根瓦何千

と飛び倒れた家もあつた時も絶対平安。暴走した運転手を憎まず、遭難そのものを感謝し、常に喜びに溢れ「自分のような幸福者はない、嬉しくてたまらぬ」といつも話されます（また死刑囚伝道に行く途中輪禍召天により、従来入信しかねていた夫人が一躍篤信、三児あり、同様主にあり絶対平安と愛敵。また玉木愛子さんの証）。

こういうエイレーネーを持つている人々の間に常に真の平和・親善・友好があるのであり、国際間民族間も同様であります。己に非ある時は神と人の前に悔改め詫び、自分が正しくてもキリスト者は人の不義を受け（コリントI六七）、そして他を容易に赦すのです。キリスト教は愛の宗教、従って赦しの宗教であります（マタイ六1214、その他多し）。全聖全義の神の前に自己がいかに罪深い者であるかを知れば、キリストの十字架を仰ぐ時、相互間のどんな難問も氷解するのであります。

その実例無数、国際間の著例がチリ、アルゼンチン両国で、七十余年前国境争いから戦端が開かれようとした時、両国の牧師と信徒が呼応し提携協力（コスタ夫人を中心とした婦人会の働き有力）、両国々民間に信仰に基く平和思想充滿、各政府を動かし和解成立、大砲を鑄潰して造ったキリストの十字架像を一九〇一年両国々境のアンデス山上に建立、その台座には「われら：両国民がキリストの十字架の下に誓った平和が破れんよりは、アンデスの岩が片々に砕けよかし」の名言が刻んであるそうです。

基督者は「誰に対しても悪を以て悪に報いず、凡ての人に對して善を図」るべく（ロマ一17）在主愛あるのみ、仇に對して復讐せず、敵をも愛するのです（同19以下、マタイ五43―

48、ルカ六27（36等）。国際間民族間もかく相互に悪意敵意を持たず、善意と愛のみを持ち、信仰に堅立し一切の武器軍備を持たず、どんな時にも非戦平和に友好する時、真の民族親善は確立するのです。

日本は過去五十年以上、帝国主義軍国主義の無謀を重ね、韓国始め満州、台湾、中国、東南アジア諸国南方諸民族に殊に太平洋戦争で圧虐罪悪を重ねました結果、正義の審判、神の審判で惨胆たる敗戦と国民困窮紊乱、旧日本亡び、戦後摂理で新憲法与えられました。平和憲法の称ある如く非常に平和主義であることその「前文」で明らかであり（その終の方朗読。二月号に記）殊に平和条項第九条重要であります（昨十二月号）。この日本憲法は米英憲法から採っている所ありキリスト教思想が入って居り、信仰以て守ることが大切で、命がけでこの擁護に尽したい、かく言う日本人多いです。現実には逆で残念、それだけに此の叫び緊要。世界各国がかかる憲法を持つことを望みます。北欧諸国やスイスは信仰により数十年平和と民族親善を保ち居り、われらはかく進みましよう。

―第二三四号（一九六九年九月）―